



寺紋
ひいらぎ おもだか
柊 かこみ沢瀉
おおげきおもだか
(通称 大関沢瀉)

大雄寺報

＝ 第 1 号 ＝

平成14年 1 月 1 日発行

発行所 黒羽山 大雄寺

〒324-0233
栃木県那須郡黒羽町田町450
T E L 0287-54-0332
F A X 0287-54-0330

編集発行人 住職 倉澤良裕

印刷所 タキザワ印刷



大本山永平寺参拝旅行 平成13年10月4日

「大雄寺報」発行に

あたって

大雄寺三十七代 倉澤 良裕

「寺院」は、宗旨への帰依の場であることとを根本としています。皆様の菩提寺、大雄寺は曹洞宗です。

曹洞宗の教えに帰依し、その教えを依りどころとし一日一日を大切に生きることです。

曹洞宗の教えとは、坐禅とは、大雄寺とは、まだまだ分からないことがたくさんあるものです。しかし、檀信徒研修会、大本山永平寺参拝旅行、坐禅会、読経会、ご詠歌教室、写経の会などを通して、また恒例の大本般若法会や大施食会法要や節分会等の行事に参加して、仏の教えに触れることができるものです。

檀家とお寺との関係のみならず、社会に開かれた寺を目指し、大雄寺からの情報や檀信徒の考え、住職の思い等を綴る寺報です。年一回の発行「大雄寺報」を皆様と共に長く育てていきたいと思っています。

大本山永平寺参拝旅行



永平寺参拝団に参加して

南金丸 佐藤 貢 氏

平成十四年は、大本山永平寺開祖道元禪師の七百五十回大遠忌で参拝団等大混乱が予想されるので、大雄寺では本年記念団体参拝をすることになり、十月四日～六日に実施されました。大型バス二台で参加者六十名、私もその中の一員として参加させていただきま

した。朝六時三十分大雄寺を出発して途中トイレ休憩だけで、午後四時永平寺に到着、霧雨の中勅使門前で記念撮影をして堂内に入る。いよいよこれからが団参の本番になる。先ず永平寺につい

てのお話のなかで、現在雲水（修行僧）が二百名、大雪が降る過酷の中でも毎日毎日規則正しい修行を積まれているとのことである。私たちもそれに習って修行の一端を宿泊して体験することになる。早速部屋割で男女別に全員一室に入る。時間を切って入浴、作法に習って夕食、法話、坐禅、雲水たちの修行生活ビデオ視聴を済ませ、九時三十分消灯。翌朝三時十五分振鈴（起床）洗面後身支度を整えて長い廊下を登って法堂（本堂）へ向かう。導師様はじめ雲水全僧侶揃って朝のお勤めに入り、私たち団参者は、ご本尊にお参りし、引き続き私たちのご先祖の法養が厳修された。同日参籠された団体は四団体あったが、私たち大雄寺団参が先頭で、法養後堂内の拝観説明をいただき、朝食後朝八時頃下山し、予定の北陸能登の旅に向かう。

好天に恵まれ兼六園見学、能登半島の千里浜（砂の海辺を八キロ程バスを走らせる）、能登総持寺祖院を参拝して和倉温泉に一泊（懇親を深める）。

最終日六日は、一昨日の北陸道を走らせ帰路に着く。

今回の永平寺参拝を振り返って感じたことは、自由、放漫の世の中で厳冬季など北陸の豪雪、酷寒の山中でも素足で厳しい掟の中で、粥と一汁一菜の

食に耐え、ひたすら禅の修行に励む若い雲水たち、並大抵では勤まらないだろう。余程の根性と精神力がなくては乗りきれないと思った。だから、私たちの寺院の代々の和尚さんも寺を預る力量と不撓不屈の精神の持ち主なのだとしみじみ感じた次第である。これは私だけでなく参加された皆さんもきつと感じられたことと思う。

これからも更に寺院と檀信徒の絆が深まることを祈念して止みません。

大本山永平寺参拝について感想

前田 伊藤 洋雄 氏

十月四日早朝、バス二台にて大雄寺門前出発。誰もが生き生きと輝いていました。車中は、他の地区の人達や近くにも顔を見るだけだった人達、初対面なのに穏やかで楽しく笑いの連続、全く疲れませんでした。また、天気が良かったので山々の自然の眺めは最高でした。一度は行ってみたいと思っていた永平寺。

バスは途中数ヶ所休憩をして、永平寺と進む。親不知、子不知を通過する際海を見て、皆歓声を上げる。日本海の景観が素晴らしく一枚の絵のようだった。心にときめきを感じ、何時までも脳裏から忘れることがないでしょう。やがてバスは、定刻少し前に期待の永平寺に到着。大きな杉に囲まれた雄大な永平寺門前にて、記念写真を撮る。雲水の案内にて寺内に入る。中は広大

で急な階段が多くて歩きにくい。荷物を仲間に持っていた人もいた。部屋は男女別々に案内され、休憩暇もなく廊下に男女別々に整列し坐禅室へ。坐禅を二十分間体験、和尚さんの講話を聞きそれから雲水の心のこもった接待で夕食（精進料理）をいただき、心が引き締まった。部屋に入り身支度を整えてから雲水の指導のもとで、速やかに就寝。なかなか眠れない。明日のために眠らねば……

翌朝三時起床、身支度を整えて、廊下に整列し雲水の指導に従え、長い廊下で登りが急で歩きにくい、列からはみ出ることがないように、途中休むわけもいかず、他の人に遅れをとらず自分なりに言い聞かせ、中には遅れがちな人もいたようだが、支え合いながら歩く。体力の関係か、なかなか足が進まない。やっと本堂に到着。早朝の講話は、心が引き締まった。永平寺での厳しい雲水の生活の様子を見ることができた。やがて空が白々と明け境内の景色がだんだん見えてくる、まさに素晴らしい——の一語でした。

拝観で雲水の心のこもった説明は、仏の教え、平和な生活、変化する現代を生き抜く原点を教えられたような気がする。たいへん勉強になり、感動を受けた。朝食（精進料理）を済ませ、雄大な永平寺の青黒いカワラ屋根をしばし眺め、幾度となく合掌し有り難く感謝し永平寺をあとにした。

旅行の関係者、役員その他お世話下

さいました方々に対し、感謝と御礼を申し上げます。

曹洞宗大本山永平寺

参拝旅行に参加して

田町 中山 和子 氏

来年は、大本山永平寺をお開きになられた道元禪師さまが亡くなられて、七百五十年をお迎えする年に当たるとお聞きしています。それに因んで、大雄寺檀信徒研修の本山参拝旅行が、十月四・五・六日の二泊三日で行われ六十余名の方々が参加されました。

一行は二台の大型バスに分乗しての行程でした。紅葉にはまだ早い頃でしたが、天候にも恵まれ長距離の旅と少々躊躇っていましたが初めて見る車窓の風景や車中の楽しい雰囲気、疲れを感じずることなく、有意義な時間を過ごさせて頂くことができて、感謝の気持ちでいっぱいです。

一泊目は、永平寺の宿泊でした。時が移り人も変わっても、七百五十年以前からの歴史は変わることのない太い大木に囲まれた永平寺は、永い間数多くの修行僧の方々によって守られてこられたものと、自然に頭の垂れる思いでした。

ご説明によれば、寛元年間道元禪師を開山として鎌倉御家人波多野義重公が建てた禅道場で、寺院の建物配置は、中国の天童寺を真似て造られたもの、禅宗様式の完全な姿を見せ、法堂、仏殿、中雀門が一線上に建てられています。

す。仏殿の左右に僧堂と庫院があり、山門の左右に東司と浴室が配置されています。ここに佇めば、建物の雄大さに息をのむ思いをしました。室内は、何処もお掃除が行き届き鏡のように光っていました。これは、雲水さん達の修行の賜物と感じ取れました。雲水さん達の目の輝き、凛々しい顔立ち、生き生きと機敏な行動で修行を積んでいる姿を拝見致しました。目的を持って日々を送ることは、このような素晴らしい姿かと、自然に合掌してしまいました。

我が家の孫達にも、一時でも良いからこの様な生活体験ができれば、日常生活にもっと規律ある日々を過ごすことができるのではと、ふと思うのでした。また、毎日大勢訪れる参籠者や僧侶達の食事作りも、早朝より（午前二時ごろのこと）十数名の雲水たちがこれに当たるとのことです。これも立派な修行。真心のこもった、栄養バランスのとれた精進料理を一品一品美味しく頂くことができました。

今、放送されていますNHK朝のテレビドラマ「ほんまもん」の尼僧寺の修行と、永平寺の修行僧を思い出して、重ね合わせ、交差したりしてテレビを見ています。（十一月初旬）

雲水たちの食事は、三食共質素で、長い月日には体調を崩し何人かは入院されることもあるとのこと。食事生活様式も、全て私達とは別の世界、仏の道には想像もつかないほどかもしれない。避けては通れない苦行の積み

重ねを通り抜けて、私達の菩提寺大雄寺のご住職となられ、ご先祖さまをお守り下さって頂いているかと思うと、感謝の気持ちでいっぱいです。

私たちは、ほんの一部で短時間でしたが、永平寺様の指示に従って、時間に刻まれた法話や坐禅、就寝、起床、食事作法などの修行を行ってきましたが、とても継続できないと思ってしまいます。夜九時には消灯で床に着きましたが、緊張して朝二時頃目が覚めてしまいました。三時までは、身支度を整えて寝具の整理整頓をして指示を待つ。まだ外は真つ暗、緊張と厳肅に、幾つもの部屋と廊下を通り、階段を百何十段も息を切らしながら登り、澄みきった広い部屋に入り、清々しい法話を聴き、身も心も引き締まり言葉に言い表せない幸せを感じました。また、朝のお勤めは、本堂で二百人以上の僧侶の厳かな読経とともに始まり、その荘厳さに感嘆し、私自身も僅かなひとときを自分なりに仏門に入ったような心境でした。

私たち参籠者一人一人のご先祖さまを読み上げられた厳肅な法要は、本山宿泊参拝の有り難い供養でありました。一度はこの様な体験をして長い人生の喜び、心の支えの一つとして心の片隅に置かれてはと、思うところでありました。

次の日は、兼六園、千里浜ドライブウェイ、能登金剛、総持寺祖院と見学し、和倉温泉宿泊とそれぞれの味の異

なった楽しみにひたりました。

この度の研修に参加した旅のひとコマひとコマは、私の人生の「思い出アルバム」に納めることができました。ありがとうございます。



大本山永平寺参拝旅行に参加して

田町 斉藤 晴雄 氏

この度大雄寺主催曹洞宗大本山永平寺参拝旅行が実施されました。十月四・六日の二泊三日、参加者は六十名で大変有意義な旅ができました。

永平寺は、約七十五年前に道元禪師により開創された出家参禅の道場であり、溪声山色豊かな自然の境に七堂伽藍を中心に七十余棟の殿堂楼閣が建

ち並んでいます。境内約十萬坪の広さを持ち、樹齡六百八十年ともいわれる老杉に囲まれ、静寂な佇まいは、出家道場として誠にふさわしい靈域であります。

四日午前六時三十分大雄寺をバス二台で出発、一路永平寺へ。予定通り午後四時到着いよいよ修行の始まりです。夕食、朝食共精進料理を食事作法でいただき、法話、坐禪、本堂での朝課

(朝の勤行)と続き、東の空がほんのりと白みかかった頃、二百人の修行僧の読経の聲が、峰に谷間に響き渡る荘厳さ、私たちのご先祖を供養する施主名を読み上げていただいた時は、有り難く身の引き締まる思いでした。道元禪師七百五十回忌の一年前の参拝で尊い修行体験をすることができました。

永平寺を後にして兼六園、千里浜ドライブウェイ日本海の荒波に打たれ広く美しい波打ち際を走らせ、総持寺院を参拝しました。二泊目は和倉温泉ホテル海望、ゆっくり温泉につかり疲れを癒し、楽しい宴会大いに食べて飲んで歌って楽しいひとときでした。一泊目の永平寺宿泊は、一生に一度の貴重な修行体験でしたが、和倉温泉は、極楽でした。

三日目は、気軽な旅で、黒羽へとバスを走らせ、途中海産物買い物と昼食を済ませ、一刻も早く我が家へと望郷の思いで帰ってきました。

この度の永平寺参拝旅行は、参加者それぞれのご先祖供養ができ有意義な

ものとなりました。一人の怪我や病氣も無く、無事帰郷できましたことは御仏のご加護の賜物と感謝致すところです。

われわれの菩提寺である大雄寺、長い歴史と貴重な文化遺産を子々孫々に永く伝えていかなければならない。永平寺に勝るとも劣らない私たちの大雄寺を誇りに思い、今回の参拝旅行に感謝。感謝。

大本山永平寺参拝旅行に参加して

前田 半藤 芙美子 氏

十月四日肌寒さを感じる六時三十分、参加人数六十名が二台のバスに乗り、大雄寺前を出発する。長時間のバス旅行不安もあったが定刻よりも早く永平寺に着いた。境内は約十萬坪の広さに樹齡六百八十年と言われる老杉に囲まれた静寂な佇まいの中、何十棟の殿堂その広さに驚き、雲水さんの案内で宿泊する部屋に通された。

夕食は精進料理を作法に基づいていただき、続いて法話、坐禪何もかも身の引き締まる厳肅な思いでした。九時消灯、翌朝は三時二十分起床、緊張も手伝って私達は三時過ぎには全員支度ができ、雲水さんの案内で法堂へ向かう。七堂伽藍の一番奥、廊下を歩き階段を幾つ登っただろうか、外はまだ暗闇、朝の勤行に参列し百数十人の僧侶の読経の中、その荘厳さに心が浄められる思いでした。私たち個々のご先祖

さまの供養もしていただきました。道元禪師の開山された修行道場は、昔と変わらぬ修行がそのまま受け継がれ、若い雲水さんたちが、それに耐え修行を積んでおられる姿には、頭が下がる思いでいっぱいでした。雲水さんのこの修行を今の若い人達に一日でも良いから体験させて、精神力をつけさせたいと思いました。

案内説明をして下さった雲水さんに、「永平寺の総てを三日間で覚えるのです。これも修行です」と聞かされた時は、並みの精神力では耐えられないことだと感服してしまいました。

大雄寺主催の永平寺旅行に参加して本当に良い体験をさせていただきました。翌日は和倉温泉での楽しいひとときを過ごし、帰りのバスもカラオケあり、民謡の勉強もありで、和氣藹々の内に参加者全員が無事帰途に着くことができました。これも仏さまのご加護、永平寺での修行のお陰ではないかと感謝申し上げます。

方丈様をはじめお世話の方達には大変お世話になりました。有難うございました。

心に残る感動を…

田町 鈴木 昭二 氏
深みゆく秋の曹洞宗大本山永平寺と能登総持寺祖院の参拝に参加依頼を受け申込みいたしました。

心に残る感動の数々感謝の念で一杯

です。道元禪師と仏教の教え、自分達に今までの生活の見直しと反省、今後の余生を更に充実すべく一日一日を大切に生きぬく力が湧く思いであります。思い出の感動の数々拙ない句ではあります、二泊三日の旅を俳句にまとめました。

観音の会津盆地は霧のなか
北陸のトンネル長し紅葉染む
櫓田の平野をくねる阿賀の川
秋晴やかすか横たう佐渡が島
榛の木も昔の名残り刈田かな
蓮の葉の皆下向きて霜の朝
赤とんぼ佐渡に伸び行く飛行雲
雲水の摺足冷えや座禪堂
秋雨や導き賜う永平寺
静寂や慕古の心に深む秋
走り根のからみ合いして木葉蝶
落葉浮く兼六園の夫婦松
能登岩の注連に眩しき秋夕陽
外浦の千畳敷や新松子
巖門に波打ちよせて草の花
秋の海安宅の関や波静か
北陸の渚ドライブ鱗雲
蹲に梅嫌さし和倉宿
海望の朝の露天湯霧はるる
総持寺の夕陽まぶしき紅葉から
千枚田休耕田のあり草紅葉
雲水と目礼交す秋の雨
永平寺思い出多し帰路の秋
終りに大雄寺にまつる俳句を記します。
緋牡丹の回廊軋む古利かな

茶釜塚木洩れ日あつむ著我の花
牡丹や萱葺き寺の無縁佛

老杉のかこむ参道著我明り

炎天や僧のあご髭いたにつき

禅寺にかすかな響き萩の寺

水琴の音聞きたくて萩の寺

石椅子に残るほてりや蟻地獄

簞目の残るきざはし秋深し

鐘楼の四本柱紅葉散る

阿羅漢の障子明かりに笑みもるる

この度の研修旅行に際し大雄寺住職
倉澤良裕様又同行の皆様は大変お世話
になりました。

皆様のご多幸をお祈り申し上げ、お
礼の言葉といたします。

平成十三年十月四日より二泊三日の
大本山永平寺参籠と能登方面の旅を檀
信徒と共に実施しました。

人員は、六十名で大型バス二台でた
いへん有意義な思い出多い旅行となり
ました。

四日大雄寺を午前六時三十分出発、
東北自動車道から磐越自動車道そして
北陸自動車道を走らせ、夕刻四時永平
寺に到着しました。記念写真撮影後、
入浴、薬石（夕食）、法話、坐禅を体
験し九時開枕（消灯）。翌朝午前三時
二十分振鈴（起床）である。精進料理
で食事作法に従って薬石（夕食）。坐
禅の体験約二十分間を坐り、雲水の生
活についてや曹洞宗開祖道元禅師七百
五十回忌を迎えるに当り道元禅師につ
いて法話を拝聴し、忙しく消灯九時を

迎えた。規則正しい生活と窮屈な宿泊
であったため檀信徒の方々は、思っ
ていた以上の修行生活に驚いていた様子
でした。

朝三時二十分起床とのもので心配も
あり夜九時には全員床についた。しか
し、朝二時頃から洗面をする者もいて、
僅かな睡眠で起床した。朝三時四十分
から法話、勤行そして、参加者のご先
祖供養の法要と続き、諸堂拝観、朝食
を済ませ、午前八時に永平寺を下山し
ました。

現在、永平寺は二百名の雲水が修行
しているとのこと。今回の参籠で雲水
達の生活の一端を体験したことは、檀
信徒の皆様にとつてたいへん貴重なこ
とでありました。

永平寺から金沢兼六園、千里浜、能
登金剛を観光し、総持寺祖院を参拝し
和倉温泉「ホテル海望」に宿泊。

温泉につかりゆったりし、美味しい
海の幸をいただき、一泊目の修行の宿
泊から解放された天国のような思いで、
宴会に力ラオケに賑やかに楽しいひと
ときを過ごすことができました。きつ
と窮屈な永平寺での参籠があったから
こそ、和倉温泉でのホテル宿泊が数倍
の喜びとなったのだと思います。

大雄寺檀信徒「大本山永平寺参拝旅
行」は、道元禅師七百五十回忌大遠忌
を記念しての参拝でした。本来ならば
平成十四年であるが、檀信徒の本山参
拝希望が強く望まれ、機運高まる今年

（平成十三年）となったわけでありま
すが、たいへん有意義な思い出に残る

旅行となりました。

住職 倉澤良裕 記す

大雄寺檀信徒研修会



檀信徒研修会参加の

感想について

田町 荒木 フヂ 氏

お寺のことは年寄り任せと、日常の
雑務に追われてバタバタとした生活を
している私に、檀信徒研修会の申し込
みの『お知らせ』は、誰かが参加する
だろうと『希望無し』と年寄りに伝え
ておきましたが、しばらく経ってから
世話人さんが、人数取りまとめがある

ので出席して欲しいとのことでしたの
で、何時もお世話になっているのです
からという気持ちから、申し込みをし
ました。数日後寺から研修会請書が届
き、六月二日午前九時集合、動きやす
い服装で参加との連絡がありました。
当日の朝は晴天で、下から歩いて山門
をくぐると、木々の清々しさを肌で感
じ凛とした気分になりました。

最近職場にパソコンが入り、頭を三
角にして、こめかみズキズキの私にとつ
て、動の修行の作務（禅堂、本堂廊下
の清掃）、静の修行の坐禅（線香一本
が燃え尽きる時間 三十分）を体験し
て、とても気分転換ができて良かった。
今、パソコンを買って三ヶ月が経ち、
何と便利な物だろう、ワープロが製造
中止になるのも頷ける。

昼食は、大雄寺婦人会の方々が心を
込めて調理された精進料理を『五観の
偈』を唱え、「生命」をいただきます
の感謝の気持ちで美味しく頂きました。
食事作法の教えも、最後の「香の物」
を一切れ残し茶碗を湯洗しながら頂く
合理性、それら一つを取っても、とて
も勉強になりました。

本堂での開講式閉講式において全員

の読経や法話（大雄寺の沿革、曹洞宗についてなど）を聞き、お寺の内外を見て菩提寺大雄寺を身近に感じ、貴重な文化遺産を誇りに思い、数年前に起きた花火大会の山火事を思い出し、檀家の一人として守っていききたいと思いました。



檀信徒研修会に参加して

田町 松本 暁子 氏

参道をゆっくり歩いて登る。時折サッーと降る雨にぬれた木々を通ってくる風は、すでに禅寺の雰囲気をかもし出していました。

朝、目を覚ますと今日一日の仕事の数

をかぞえ、時計とにらめっこをしながら何やかやと忙しがって一日を過ごし、夜になって何か宿題をやり残した様な気分です。床につく。そんな私にとって久しぶりに、ゆっくりと進む時の流れを心と体で感じながら参加できた、有意義な研修会でした。

大雄寺は菩提寺でありながら、ただ先祖の供養、墓参りの時のみお寺を訪れて来ました。

それが今回初めて、自分の研修の為に友人の勧めもあり、お寺を訪問しました。

ひんやりとした空気、広々とした本堂、そこに坐るだけで心が引き締まり、大雄寺の歴史、禅寺としての大雄寺の話を伺い坐禅堂へ。

坐禅は足がしびれて痛い、窮屈なものと思いこんでいましたが、実際に坐禅をしてみると思ったほど足も痛くなく窮屈でもありませんでした。多分一番楽で正しい姿勢で坐る方法を教えていただいたからだと思います。

背筋を伸ばして真っ直ぐに、肩の力をぬいて少し辛くても我慢して坐る。

『この坐り方が生き方なのです』と言われたように感じ取りました。

大雄寺の三つのS、清潔はお掃除をすることにより、静寂は坐禅をすることにより、質素は食事の中から、教えられるました。

朝の連続テレビ小説で尼寺での食事の様子が映し出され、この研修会でいただいた「五観の偈」と全く同じ言葉を

唱えていたのに驚き、もう一度読み直してみました。

この研修会に参加して、何やかやと忙がしがらず、肩の力をぬいて、出来るだけゆったり、穏やかな気持ちで毎日を通り過ぎていくという感じが強くなりました。

再度この研修会に参加したいと思っております。

檀信徒研修会参加の

感想について

今市市 高橋 正義 氏

七月二十九日第三回檀信徒研修会に私たち家族三人で参加しました。参加者は、二十名でした。当日は、盛夏というのにそんなに暑くもなく、全員最後まで研修を受けることができました。午前九時、倉澤住職様の開講式のご挨拶から研修が始まりました。般若心経を唱えているうちに始まる前までの緊張感が少しづつなくなってきました。曹洞宗の開祖道元禅師の教え『眼横鼻直』を我が家でも色紙にして部屋に置きたいと思います。大雄寺に伝わる掛軸や伽藍などを見て素晴らしい、自分の菩提寺が由緒あるものだと思いに思いました。

そして、いよいよ本日の研修の一番と期待していた坐禅が始まりました。

坐禅の仕方の説明があつて禅堂に一人一人作法に基づき厳粛な気持ちで入り座に着きました。室内は、冷気が漂い静まりかえって荘厳でした。足がしび

れて背筋が痛く、普段やったことがない姿勢で苦しくどれくらい過ぎたでしょう、うか、スーと右肩に何かを感じました。あつ、打たれる。警策だと思い直ぐ首を左に傾けた瞬間。バシッという音と共に急に身体が軽くなって、足のしびれや背筋の痛さがなくなりました。ありがたさと自分の日常生活の甘えの反省をさせられました。

坐禅が終って世話になった禅堂や東司（トイレ）、本堂廊下の清掃、すなわち作務を全員で手分けして行いました。とりわけ東司掃除の希望する人が多いことに感激しました。一通りの研修が終って中食の時間が来ました。『生命をいただく』本当に尊いものだと感じました。

五観の偈は、家でもやりたいと思いました。そして、最後にもう一度般若心経を唱え全員で記念写真を撮り、研修終了証書や記念品を頂きました。始めは緊張と不安がいっぱいで最後までやれるかと思っていました。終了した時は、本当に嬉しかったです。また、何時か機会がありましたら坐禅をやりたいと思います。

ありがとうございました。

無念夢想

田町 須永 直希 君

今回の檀信徒研修会に参加させていただき、掃除や坐禅などいろいろな事を体験することが出来ましたが、何と言ってもメインは、坐禅にあったと思

います。

坐禅が始まる前に住職からいろいろと説明があり「目を瞑っているようだが、実は半眼である」とか「宗派によって坐禅の考え方が違う」などと言った、思わず声を出して頷いてしまうような発見があるなかで坐禅が始まりました。幼い頃にも何度か経験があり、いざ始まると体が覚えていっているようで自然とそれらしい形に落ち着きました。

「無我の境地」と言われても、カサツカサツと歩くたびに聞こえる住職の衣の音、動き回る住職の影、禅堂に響き渡る警策（キョウサク）の音、今も昔も変わらず、次は自分かも知れないとドキドキしていました。ただ昔と違うところは、禅を行う気持ちが少しわかったような気がします。高校生である僕が、この「何か」を感じたのですから、一緒に参加した父はもっと、とてつもないものを感じ取っていたのではないのでしょうか。

どのくらいの間坐禅を組んでいたのか、普通四十五分と言いますが、緊張感も手伝ってとても長いものに感じられました。しかし、経験者と言う換言から僕は、開始から微動すらしなかったと思います。最後に一人つつ警策を受けましたが、痛いと言うよりも何処か気合というものがスーッと体に入っただような気がしました。

この研修会を通して、仏教への深い感心もありましたが、それよりも高校受験が終わって、夏休みも始まったば

かりと何処か弛んでいた自分に気合が入り、残りの夏休みを有意義に過ごすことができました。また、来年も気持ちに歪みが出てくるようであれば、今度は個人的に「無我の境地」へと入りたいと思います。

檀信徒研修会に参加して

前田 新江 快 君

ぼくは、夏休みの八月四日に大雄寺の檀信徒研修会に参加しました。

なぜ参加することになったかというと、おじいちゃんがぼくに「快も参加したらいいよ」といったからです。大雄寺は、前に行ったことがありましたが、ちょっと怖い感じだったので、ぼくは「いやだ」といいました。でも、おとうさんも一緒だときいて、参加することにしました。

朝、大雄寺へ行くと、ぼくくらいのおともだちも来ていてちょっと安心しました。みんなおとうさんやおかさんと一緒にしました。

さいしよに住職さんがお話しをしてお経を読みましたが、よくわかりませんでした。

次に、坐禅をしました。しずかな部屋で特別な座り方をして、目をつぶりましたが、みんなのことが気になってごそごそ動いていたら、棒でかたをたたかれました。でも、あまりいたくなかったです。

坐禅のあとは、お寺の廊下を雑巾でふきました。雑巾で廊下をふいたのは、

はじめてでしたが楽しかったです。おとうさんも「ひさしぶりだなあ」といっていました。

それから、お寺の宝物を見せてもらいました。なんだかよくわかりませんでした。幽霊の絵が怖かったです。

お昼は広い部屋で、みんなとおすわりして食べました。みんなお話しをしないで静かに食べました。ぼくも、話したかったけどがまんしました。

最後に、住職さんとお経を読んで、修了証と記念品をいただきました。

「何か質問がありますか」と住職さんがいったので「足がしびれた」といいました。

楽しかったので、また参加したいです。



大雄寺檀信徒研修会を

実施して

大雄寺住職 倉澤 良裕

當山には禅堂を備えるが故、会社、学校からの申込みにより大人から子供まで広く坐禅研修が行なわれております。また、毎月第二・第四日曜日には坐禅会を開催し、坐禅を希望する多くの人たちと共に坐しております。

しかし、檀信徒はどうであろうか。坐禅会があることは知っていても、なかなか坐禅を経験することはできないようであります。

我が曹洞宗は、両祖さまが示された坐禅の実践を通して身と心を調え、すべてのものに思いやりの心をもって接し日々報恩感謝の日送りを信仰の要としています。檀信徒であれば当然、坐禅の体験の場も必要なことであります。大雄寺では、平成十三年六月より計四回、大雄寺会場で檀信徒対象の研修会を開催しました。

差定は午前九時

開講式

法話

坐禅の仕方説明

坐禅一炷

作務

正 午

中食

閉講式

各回とも約二十名の参加でした。法話については、曹洞宗の教えや道元禅師のお話、菩提寺大雄寺の歴史、諸堂拝観。坐禅の仕方説明後、禅堂にて三十分間の只管打坐。終って本堂、禅堂、東司（トイレ）の作務（清掃）。大雄寺婦人会会員（こ詠歌講員並びに婦人読経会）による調理奉仕によって精進料理メニューの食事作法での中食。閉講式においては、参加者それぞれからの感想と質疑応答で終了しました。計四回延べ八十名の檀信徒がこの研修に臨まれました。

参加者からの主な感想として

- 一、檀家と菩提寺との親密感が深まった。
- 二、静けさの中で心の落ち着きを得た。
- 三、日々忙しさから離れて、このような時間を過ごすことは必要であると思った。
- 四、掃除をすることで親しみをもち、よそよそしさがなくなった。など

私（住職）からの感想

宗教とは、曹洞宗の教えとは、菩提寺大雄寺とは、いろいろ身近なことからの法話を聴いていただき、緊張しな

各種の行事

皆さまのご参加を待っています

ご詠歌教室

ご詠歌教室について

ご詠歌指導 齊藤 義雄 先生
平成十四年の新春を迎え、大雄寺檀信徒の皆様、ご清安にて共にお慶び申し上げます。

ご縁をいただき、ご詠歌教室として、毎月第二・第四水曜日午後一時半から四時まで楽しく練習しております。
大雄寺様では、毎年八月八日大般若会、

からも三十分間の坐禅を行い、東司（トイレ）掃除も実践したことは、年数回、法事や恒規法要のために寺に訪れる時の気持ちと違い、「身近な家の寺」という感覚で今まで気付いていなかったことに気付く、親しみを深め、住職や寺族の人となりにより身近に受け止められたようであります。初めての檀信徒対象の研修会であったが、多く得るところがありました。

本年第二回檀信徒研修会を真の寺檀一如の実践として、折に触れ檀信徒の参加を呼びかけ一人でも多くの方々が禅の心に触れていただきたい。

十月一日大施食会、十二月十八日観音様のご供養され、その折にご詠歌の皆さんが参加奉詠されていただきますのが、楽しみにしております。

昨年鬼怒川温泉あさやホテルにて、第二十五回梅花流栃木県奉詠大会に二回目の参加登壇奉詠され、修証義御和讃を立派にお唱えされました。

これも講長（大雄寺ご住職）さま奥様の深いご理解のもと、心温まるお手紙お知らせを毎月頂戴しながら、勉強させていただいております。
本当に有り難いことであります。

ご詠歌のこころ（詠心）

『やわらかく、やさしく、まるく』
『声もよし、節もよしとて高くなる、まごころなきは、下手とこそ知れ』

詠道の誠め教えより。

仏道修行は、無我行の実践であると教えられています。

皆様の一心にお唱えされる歌声に仏まします梅花流詠讃歌であります。
今年は、永平道元禅師さま七五〇回忌大遠忌奉讃の年にあたります。

梅花流詠讃歌も、五月二十二日（水）、二十三日（木）東京日本武道館にて創立五十周年記念奉詠大会が開催されます。

こころ静かに、本尊さまのおそばで詠讃歌をお唱えしてみませんか。

この一年が、皆様にとって、また世界の国々にとっても、穏やかで幸せな年であってほしいと、心から願ってやみません。

ご詠歌教室に学んで

堀の内 高梨 ゆり子 氏

歲月人を待たずと申しますが、特に最近月日の経つのが早く、そんな思いがいたします。梅花流ご詠歌教室も平成十年二月に始めて、はや四年が過ぎようとしています。

齊藤義雄先生をお迎えして会員は二十名。多少出入はありましたが、今も二十名ほどで教室が行なわれております。やっとこの頃になって唱える言葉や意味が心に響き、内より出るような

気持ちになってきました。上手にはなれませんが、ご詠歌の心が少し分かってきたように思います。曹洞宗は形より入ると住職さんに教えられましたが、ご詠歌も同じで教本を開くことも閉じることもお作法があり、茶道にも通じる所作を勉強いたしました。当然精神修養でもあります。その上六月の大般若、十月の施食会に参加させていただき、私なりに充実感のある日々を過ごさせて頂いております。

大変だと思っていた検定も発表会も、幾つになっても挑戦する勇気みたいなものを体験できることは、意外に有り難いことであり、たまに緊張することもあり、早めぬ薬かも知れない、こんなことを考え受け入れております。

十一月十九日には皆で「修証義御和讃」を大雄寺講として梅花流栃木県奉詠大会の壇上で発表して参りました。鐘（ショウ）と鈴（リン）との音に合わせたお唱えは、無であり空であります。清々しい一日でした。

菩提寺の大雄寺さんに読経会、ご詠歌教室と毎月三回通わせていただき少し仏に近づけたかなと思いが安らげます。

これからも本当の仏になるまで精進していきたいものと思っております。



坐 禅 会

「日曜坐禅会に参加して」

西那須野町 村岡 義明 氏

昨年一月から第二、第四日曜日の坐禅会に参加させて頂いています。参加の動機は、以前から坐禅には興味がありました、四十代半ばにして「心と向き合う時間が持たいたい」と思う気持ちが強くなりました。当初漠然とした動機です。三日坊主で終わるのではと自分自身半信半疑でしたが、お蔭様で約一年が経過しようとしています。

坐禅会は朝七時半から始まります。

山寺の静寂の中、線香が燃え尽きる迄の約四十分の坐禅、続いて坐禅堂の拭き掃除の作務、その後住職と参禅会出席者との語らいの時間があり、九時頃には会は終了します。約一時間半の短い時間ですが、山寺の古い佇まいの中に「ひたすら坐る」坐禅で心穏やかに自分の心と向き合い、作務では感謝と奉仕の心を拭き掃除に込めるといふ、非常に素朴な行為ではありますが、日常生活の中で私たちが忘れ掛けている大切な事を思い出させてくれる貴重な時間です。

坐禅での私の課題は「何も考えないでひたすら坐る」ことです。約四十分の坐禅で何も考えないで居られる時間は約五分足らず、雑念が頭の中を駆け巡ります。参禅会を通じて、当たり前

のことを、当たり前にやっていたのことは如何に難しいことか思い知らされました。そこに次の飛躍の糧があるのでしょうか。

さて、参禅会では大雄寺住職ご夫妻には大変世話になっております。今回末筆ながら日頃のお礼を込めて寄稿させて頂きました。今後ともよろしく御願ひ致します。

本年も皆様にとって良い年でありますように祈念申し上げます。

合 掌



日曜坐禅会の感想

大田原市 桑名 知久 氏

私が、日曜坐禅会に参加させて頂いてから三年になります。この坐禅会に参加するきっかけは、私自身慌て者の性格で、もう少し落ち着いた性格になりたいと思ひ、私の所属する会社の社長の勧めもあり、参加させて頂いております。

日曜坐禅会に参加するようになって気付いたことは、四季の風情についてです。暖かい時期には、鳥の鳴く声、虫の声、境内の植物、特に春の牡丹が綺麗に咲きます。寒い時期になると、裸足で坐禅を行うため、寒さが身に染

みます。仕事がほとんど室内であるため、今まで漠然としか感じませんでした。が、四季の移り変わりを身近に感じようになりました。

坐禅をしていて思うことは、坐禅中には、頭の中の雑念や妄想には関わらないようにしなければなりません、なかなかそのようにはできず、頭の中の雑念、思いに気を取られてしまします。雑念や考え事に気を取られないよう努力してこれからの坐禅に臨みたいと思います。

季節を通してこの坐禅会に参加し、特に冬の寒さの中での坐禅は、やり遂げたという自信を得られます。これからも極力参加して、落ち着きのある人になりたいと思います。

婦人読経会

婦人読経会について

田町 大島 正子 氏

友人に誘われて読経会に入り数年が経ちました。読経会は、毎月一回第一火曜日に行われています。春夏秋冬は朝八時から、冬は八時半から始まり二時間位で終ります。今では私にとって欠かせることの出来ない大切な一日となっています。冬の寒い朝は、ストーブを焚いて部屋を暖め、夏は廻廊に打ち水をして私たちを迎えて下さいます。

冬の本堂の寒さは、格別で、お唱えが始まると吐息が白く淡い靄（もろ）となり濃

くなったり薄くなったりしながら、お唱えが終るまで続くこともあります。朝の静寂の中でのお唱えは、身も心も引き締まり、寒さなど忘れてしまします。夏の本堂は、ひんやりとして、茅葺き屋根でなければ味わうことのできない涼しさです。

主に般若心経と修証義をお唱えします。「色即是空 空即是色」と一生懸命お唱えしていると、私には般若心経の意味は分かりませんが、何となく有り難い気持ちになってきます。始めのうちは、文字を追うことで精一杯でしたが、回を重ねることに滑らかにお唱えができるようになりました。

お唱えが終ると法話があります。生活に即したお話を下さいますので、聞きながら聞くことができます。

法話が終ると庫裡にて、美味しいお茶をいただきます。雑談をしながら和気藹々と楽しいひとときを過ごします。お正月には大雄寺秘伝の五味糖をいただき、牡丹の時期にはお茶会を季節を感じるおもてなしの心に感謝しております。私も日常生活の中に、そんな心を取り入れていきたいと思っています。僅かな朝の二時間ですが、清々しい気持ちになり、「ラカンの丘」を一周して帰ります。

読経会は、現在十五名ですが、もっと多くの方が入会されて、たくさんの方々と触れ合いながら、他の人のため自分のためにと、努めていきたいと思っています。

写経の会

写経の会について

西那須野町 小瀧 龍雄 氏

すでに「大雄寺写経の会のご案内」でご承知かと思いますが、大雄寺写経の会が、平成十三年十月二日（火）第一回書写会により発足致しました。毎月一回、第一火曜日の午後二時から老杉と竹林に囲まれ深閑とした古刹の研修道場月光館で行われています。そして、一年分の写経を十二月十八日石佛合掌観音像に納経されるということになっております。

写経は、主として「般若波羅蜜多心経」（般若心経又は、単に心経とも言われております）を書写いたします。般若心経は、二六〇字あまりの短いお経です。写経の目的は、いろいろあると思います。

◆仏への帰依（心から仏を信じ敬うこと）

◆先祖、父母、親族などの菩提の供養
◆書写本人はじめ家族の安全、息災、病氣平癒

◆自身自身の修業、勉学のため（特に毛筆による細字の勉強には最適だと思います）

◆その他
などあると思います。

写経は、字の上手下手など問題でなく、ただ只管一字一字に祈りを込め無

心に頭をカラッポにして書写するだけです。書くほどにいつしか上手に書けるようになるものです。どなたでも気軽にできます。

写経日によること

全員で合掌し「般若心経」を唱和します。

書写を行います。（お手本、用紙あります）

終って回向文を唱和します。

解散です。

◆合掌について

合掌とは、拝むことです。『右仏左我れと拝む手のうちぞゆかしき南無の一声』という歌があります。

南無とは帰依することです。帰命の精神です。相手を絶対に愛し敬い信頼することです。この南無の心を形

によって示したものが合掌です。

◆回向文について

回向とは、写経など行ずることにより得られた功德を他に『回し向ける』

一切衆生と共に功德を分かち合うこと。

写経の会は、発足日も浅く会員数も少数ですが、毎回極めて和やかに熱心に励んでおります。

何かと忙しい世相であります、月一度二時間程の落ち着いたひとときを持つことも良いのではないのでしょうか。

是非たくさんの方々のご参加を会員一同心からお待ちいたしております。

合 掌

写 経

前田 新江 彰 氏

金田一京助の国語辞典によると、写経とは「故人の冥福を祈ったり、自分の信仰心の証としたりするために経文を書き写すこと」と記されている。

人間、何人も誕生して幼年期から少年期、青年期へと成長し大人に至る。そしてやがて老いを迎える。

自分自身の今までの生活を考えると、それは両親の愛に育まれた幼児期、幼稚園の生活から始まり時代的に何もかも不足、不足で無い無いくしだった少年期、大東亜戦争が終結し世の中全体が百八十度転換してガラリと変わった戦後社会を生きた青年期、先人の知恵と努力が礎となって形造られた豊かな社会の現在、この道程を顧みるとき

何とかこれまで歩み続けてこられたのも先祖、先達のお蔭であるとしみじみ思う。

写経をすることで故人や先祖、先達の冥福を祈り、感謝を表わすことができる」とすればこれほど有り難いことはない。

個人で写経をやろうと考えても、できるようでそれはなかなかできないものである。

毎月一回でもよい。下手でもよい。二百六十二文字の般若心経を心を込めて書き写す。

折しも大雄禅寺で「写経の会」を始めるという。誰に勧められるというこ

ともなく早速入会してみると、月光館の静けさの中での一文字ひとまじの書写は意義深い。

はたして、これから先何枚書けるであろうか。先祖・先達の供養のために楽しみながら書き続けたい。



俳 句

俳 句

高梨 ゆり子

牡丹寺野点頂く緋毛氈

葺替や警策ひびく坐禅堂

涅槃絵やあの世この世の境なし

茅葺の寂もる伽藍仏生会

水琴窟の音引き入れて夏座敷

打水をして迎えらる坐禅の会

青葉風通す六百巻の経

御詠歌に蟬の声和尚古刹かな

読経会果ててくつろぐ庫裏簾

雑念を和讃に封じ施餓鬼寺

茶筌塚ささめ紅葉に染められる

梵鐘や藩主の墓の冬さるる

須藤 新一郎

月光館身に入む写経かな

禅寺で和んだ友に秋の声

増田 圭三郎

観音に冬日のそく杉木立

冬立つや写経机の硯石

遥かなる青き カウラの空

大雄寺東堂 倉澤 良一

オーストラリア、シドニーから西へ向かって約二百キロ入った所に、カウラと言う人口八千人程の小さな町がある。

青々と牧草地が広がる穏やかな、平和な町。しかし、第二次世界大戦中捕虜収容所が造られたところである。今回、全国教師有志の視察研修旅行でこの町を訪れ、ほとんど日本では語られなかった悲しい物語がそこにあった。この収容所は、イギリス政府の要請により造られたもので、当初はイタリア兵とドイツ兵の捕虜を収容する目的で建設されたのだ。しかし、太平洋地域に戦火が拡大し、日本兵捕虜を収容することとなったのである。

オランダ軍に捕らえられたインドネシア兵、広さ五ヘクタールの土地は、四つに区分され日本兵はその一つにまとめられ収容された。捕虜たちは、厳しい生活を課せられ、農場での過酷な作業を強いられた。食糧は、遠くニューギランドより運ばれたが、「生きて虜囚の辱めをうけず」と戦陣訓を叩き込まれた日本兵にとっては、未来に対する絶望が深まり、捕虜集団脱走が決定されたが、着の身着のまま大平原をさまよい、餓死する者や負傷する者が多く出た。再収容された兵士は、戦後

帰国できたが、無念の戦死者は、丁重に埋葬されている。「捕虜の恥を残さず」との願いから、墓地には名前が記されていない。

この悲劇を悼むオーストラリア人は、この地に美しい日本庭園を造り、日本文化センターを建て痛ましい戦禍のせめてもの償いとしている。

今は広々とした放牧地となっている。私は、収容所跡に立ち昔と変わらない真っ青なカウラの空を仰ぎ、多くの捕虜たちの御霊に祈らずにはいられなかった。

合掌

一口法話

住職 倉澤 良裕

手を合わせる



手を合わせることは、インドにおける挨拶として「ナ

マステイー」と言って互いに相手を敬う礼儀とされています。日本人の心にも通ずるものでありますから、手を合わせてお願いをしたり、手を合わせてあいさつしたり、手を合わせて食事をいただいたりしています。

手を合わせることは、心のあたたかさややさしさを感じさせ気持ち落ち着き静かになります。

私たちは、毎日の生活を送っていく上で、手を合わせなければならぬことがたくさんあります。

次の四つの恩に手を合わせるものが肝要です。

一、父母の恩（先祖への恩）

二、衆生の恩（多くの人への恩）

三、国土の恩（多くの物や他のものの

生命への恩）

四、仏の恩（生かされているという素直な心）

父母の恩（先祖への恩）

「父の恩は山よりも高く、母の恩は海よりも深し」と昔から言われ、親に孝養を尽すことは、あたりまえのことです。だから、戦前は親孝行ということでは日本は代表的な国でした。それが今は、最下位の国となってしまい、手を合わせる心を忘れていないだろうか。

私たちの生命は、父母の生命を受け継ぎ、父母は、それぞれの父母の生命を受け継いでいます。遡ってはるか昔のご先祖の生命を受け継いで、父母を代表して、ご先祖を代表して今生きているのです。

これらご先祖のうち一人でもいなければ私という存在は、この世に存在しないということになります。父母や祖父母、ご先祖に手を合わせ感謝することはあたりまえのことです。

衆生の恩（多くの人への恩）

「人間」は互いに支え合いながらその間で、その中で生きているという字で示されるように、人は一人では生きて行けません。生かされていることに

感謝し手を合わせるのです。手を合わせ人に接するとき決して争いは起こりません。手を合わせる心を失ったとき、心は殺伐として人間同士の争いとなります。

国土の恩（多くの物や他のものの生命への恩）

「生命をいただきます」と言って食事をしています。私たち人間は、動植物の尊い生命を犠牲にして、その犠牲の上に成り立っています。動植物の尊い生命を無駄にすることなく、感謝していただき、食べることで得られたエネルギーを人のため、社会のために活用するよう努力をしています。

仏の恩（生かされているという素直な心） 私たち人間は、今、あなたのご恩にて生かされているということに素直に受け入れる心、清浄で美しい心が仏の恩であります。手を合わせる報恩感謝の心で、今、ここを生きていることなのであります。

右手は仏さま、左手は私たち、手を合わせることは仏さまと私たちとが一つになる、心と心のかよう印であります。



「いのちをいただきます」

唐代の詩人張継が寒山寺の近くを通った時詠じた「楓橋夜泊」である。拓本を購入す。また、「寒山拾得」も有名である。この拓本も購入。
北寺塔…八角9層高さ7.6m、中国特有の大きな塔である。

10/25 (木) 上海～成田

8:30 ホテルをチェックアウトして、上海古い町並みが続く店を歩き買い物。早めの昼食を済ませ、上海空港へ。
午後2:10 離陸、一路平安成田空港着。日本時間6:00 到着。

とうこうしんえつぜん じ

東皐心越禅師と大雄寺との関係

東皐心越禅師 (1639～1695)

せうこうしんえつぜん か ぶ ほうこうけん

中国浙江省金華府浦江県に生まれた。32歳(康熙9年)杭州西湖の永福寺に入る。17世紀半ばの中国は、明朝が滅び清朝に替わる際の混乱期であり、中国人僧侶らが多数日本へ来航している。

大半は、黄檗宗に属し、隠元は京都万福寺を開き有名である。長崎の興福寺澄一禅師の招きで、1677年(延宝5年)38歳来航、日本に近世篆刻を伝えたこととされ、元禄元年(1688)心越50歳、水戸で光圀に会い「涅槃図」を画き親交を深めた。

元禄6年(1693)7月心越55歳、那須温泉に来る。那須温泉から帰りに黒羽に立ち寄り、黒羽山大雄寺に訪れる。この時代の黒羽は、この地方の物資の集散地で、米や材木などが那珂川を下って江戸へ運ばれていた。市街は那珂川を挟んで、東岸が黒羽藩大関氏18,000石の城下町、西岸は、河岸問屋が軒を並べていた。黒羽には元禄2年4月、松尾芭蕉がみちのくへの途中を14日間ほど滞在したが、心越禅師が訪れる4年前のことであった。

その時代と変わらないであろう大雄寺、現在の大雄寺も杉木立に囲まれた山道を登り、総門をくぐると目の前に大伽藍の本堂が現れてくる。総門に入って左側の建物が禅堂である。総門に掲げられる「霊鷲」^{りょうじゅう}と禅堂にある「学無為」^{がくむゐ}の篆書額、共に東皐心越禅師の筆である。



霊鷲 (総門)

総門の「霊鷲」の二字から心越禅師がいた杭州の永福寺の飞来峰を霊鷲山と言っていた、その思いからであろうか。禅堂の「学無為」は、禅語で「無為を学ぶ」で「とらわれない、こだわらない心を学ぶ」と解することができる。^{かくもんかんてつ}
その時代の大雄寺住職は、13代廓門貫徹大和尚であった。元禄3年(1690)晋山(住職になったこと)であるから心越禅師の来訪は3年後である。

心越禅師は、「達磨図」と「乗龍観音・梅・竹」を描き、廓門貫徹大和尚に晋山を祝って贈っている。これらは大雄寺14代富士道庶大和尚により軸にして今なお大雄寺に保存されている。

黒羽藩については、藩主は大関増恒で、貞享3年(1686)江戸藩邸に生まれ、元禄元年(1688)11月増米公から家督を相続したが、松尾芭蕉の黒羽滞在時は2歳、心越禅師大雄寺来訪時は6歳であったため、なおも江戸にいた。

マスヒデ

21代増栄…元禄元年12月13日亡

マスシゲ

増茂…

マスツネ

22代増恒…増栄の孫、元禄元年11月家督相続

廓門貫徹大和尚とは

大雄寺住職13代…一切経(中国明、清時代の経山寺版、4500巻)徳川8代將軍吉宗より施与され、大雄寺に寄付。現在経蔵内輪蔵に納められている。將軍にも親講するほどの漢学者の僧であった。

しんえつぜん じ

心越禅師について

水戸光圀と心越禅師の有名なエピソードがある。

ある日、光圀は心越禅師の力量を試すため水戸の茶室に招き、一服のお茶を差し上げる。お茶を口にしようとしたその時、かねて準備させていた家来に鉄砲を一発、ズドンと放させた。しかし、心越禅師は、泰然自若として一滴もこぼさず飲み干しました。

光圀が「ただいまは失礼した」と詫びると、心越は「鉄砲は武門の常じゃ、ご配慮無用」と答え、光圀は、安心してお茶を正に飲もうとしたその時、心越は「喝」と大声で一喝した。光圀の手は思わず震えて、茶碗を落としてしまった。心越は「喝は禅家の常でございます」と平然と答えた。

心越禅師の力量がどれほどのものかを試してみるののであるが、あべこべに試された結果となってしまった。と言うお話が伝えられている。

とうこうしんえつぜん じ だいおう じ 東皐心越禪師と大雄寺

住職 倉澤良裕

～～～中国 杭州・蘇州の旅～～～

今から約310年前に、中国僧の東皐心越禪師が大雄寺を訪れました。当時の大雄寺住職は、13代廓門貫徹大和尚でした。この度、心越禪師の生まれ故郷である中国浙江省浦江県に心越記念館が建設され、その落成開館式に臨むご縁をいただきました。私大雄寺37代住職を継承し、300余年の月日が過ぎ、今遥かなる出会いを感動と期待を持って5泊6日の中国浙江省への「東皐心越禪師足跡巡拝の旅」をしてきました。ここに旅行記をまとめました。

2001/10/20 (土) 成田～杭州

日本航空にて上海へ 時差1時間、実乗3時間

成田発10:00

上海着12:00

出迎え殷先生(浙江省在住、仏教研究者)と専用車で杭州へ、所要時間2時間30分 ホテル「杭州五洲大飯店」着。

10/21 (日) 杭州～浦江

8:00 西湖着、西湖遊覧約40分間、西冷印社(篆刻専門店) 印章購入、靈隱寺参拝。永福寺跡参拝。この永福寺は心越禪師が住持していた寺であったが、現在は荒れ果てた寺跡であった。一部の石積みと基礎石が残るのみ。復興計画があるという。

昼食後心越禪師生誕の地、浦江県へ(車で約3時間) ホテル「浦江迎賓館」夕刻到着。ホテルは完成して間もないようで工事がお粗末。夕食に日本から来た大本山永平寺傘松会編集部一行と鳥取県住職一行と一緒にいる。

明日東皐心越記念館開館式とシンポジウムが開催される予定。記念品や資料を戴く。

10/22 (月) 浦 江

8:00 ホテルを出発、浙江省関係当局の先導で会場(仙華山)に向かう。

9:30 東皐心越記念館開館式に臨み、道教寺院にてシンポジウムが行われた。ホテル「浦江迎賓館」にて祝賀パーティー後、車で杭州へ戻る。夕刻20日に宿泊した杭州のホテル「杭州五洲大飯店」に入る。前日購入した印章届く。

東皐心越禪師…1639年浙江省浦江県に生まれる。32歳杭州永福寺住持、37歳日本に来訪。
1693年(元禄6年)55歳黒羽山大雄寺を訪れる。大雄寺住持は、13代廓門貫徹大和尚であった。廓門貫徹大和尚は、漢学に秀でる。
この度の「東皐心越禪師足跡巡拝の旅」は、心越記念館開館式参加と大雄寺に深い関係があったというご縁をいただき、言うなれば300余年の出会いである。

10/23 (火) 余 姚

8:30 ホテル出発、杭州より余姚県へ車で向かう。高速道路で2時間半。王陽明、朱舜水の資料館と四賢人碑見学。昼食後高速道路にて上海に向かう。

5:00 ホテル「虹橋賓館」到着。夕食後夜の上海市内を歩く。

王陽明…(1472～1528) 明の儒学者。浙江省余姚の人。
朱舜水…(1600～1682) 明の儒学者。明の滅亡に際し援助を求め7回来日、清の成立に伴い亡命し帰化した。1665年水戸2代藩主徳川光圀が水戸藩に招く。水戸学思想に大きな影響を与える。

10/24 (水) 蘇 州

蘇州へ、寒山寺参拝、寒山寺で住持病気のため不在であったが、監院と会うことができた。書を書いてもらい軸を購入。「佛光普照」と「ラクス」に朱印、書は「寒山鐘聲」の軸。売店で寒山拾得の拓本を購入。鐘を撞き記念写真を撮る。

北寺塔参拝と拙政園という有名な庭園を見学。

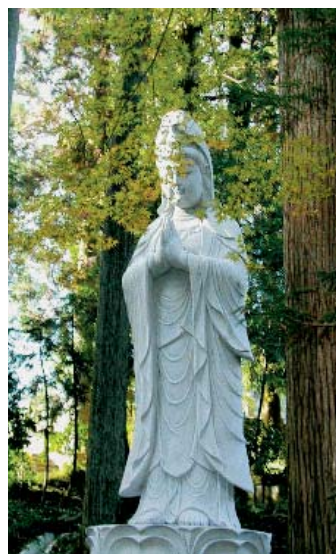
上海に戻りホテル「虹橋賓館」に帰る。

寒山寺…山の中にあるのではなく平地の街の中にある。唐代の僧、寒山がこの寺にいたことから「寒山寺」の名がつけられた。

楓橋夜泊	張継
月落烏啼霜滿天	月落ち 烏啼いて 霜 天に満つ
江楓漁火對愁眠	江楓 漁火 愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺	姑蘇 城外の 寒山寺
夜半鐘聲到客船	夜半の鐘聲 客船に到る

平成十三年の思い出

雅楽コンサート……五月四日牡丹満開の中で雅楽演奏会を実施した。
合掌観音像建立……山道を登りつめた杉木立の中に石仏合掌観音像が安置された。蓮華下に写経を納めることができる。



平成十三年寄付芳名単

群馬県安中市	渡辺 一雄 様	東京都江東区	平野 博之 様
東京都狛江市	長 義子 様	大田原市	足立 祐二 様
大田原市	渡辺 栄子 様	大田原市	小川 喜一 様
西那須野町	小瀧 龍雄 様	大田原市	人見 政夫 様

平成十四年の予定

- ① 第二回檀信徒研修会実施
- ② コンサート実施
- ③ 道元禅師修行の寺 中国「天童寺と普陀山」参拝旅行実施

平成十四年の行事

一月一日より	初詣
二月三日	節分会
三月十八日～二十四日	春彼岸会
五月一日より	牡丹開花
五月八日	花祭り
五月十二日	コンサート開催
六月八日	大般若法会
八月十三日～十六日	盂蘭盆会
九月二十日～二十六日	秋彼岸会
十月一日	大施食会
十二月十八日	観音祈願法会
十二月三十一日	除夜法会
旧正月二十八日	白旗不動尊大祭
毎月第二・第四日曜日	坐禅会
毎月第一火曜日	婦人読経会
毎月第一火曜日	写経の会
毎月第二・第四水曜日	ご詠歌教室

大雄寺ホームページ

詳細説明、一口法話、お知らせページ、掲示板など掲載
U R L <http://www.daiouji.or.jp/>
E-mail ryoyu@daiouji.or.jp